

中学校

平成 12 年 度

教育研究員研究報告書

外国語 (英語)

東京都教育委員会

平成12年度教育研究員（外国語部会）名簿

男子 9人 女子 5人 計 14人

No.	区市名	学校名	氏名	分科会	備考
1	新宿区	牛込第一中学校	瀧口 均	1	
2	世田谷区	太子堂中学校	岸本 聡	2	
3	渋谷区	笹塚中学校	堀 恭子	2	
4	中野区	中央中学校	大谷 祐子	2	副世話人
5	杉並区	泉南中学校	惣田 修一	1	
6	足立区	蒲原中学校	大河 由起子	1	
7	葛飾区	新小岩中学校	紺野 正典	2	
8	江戸川区	二之江中学校	田島 淑行	2	
9	八王子市	八王子第六中学校	岩崎 浩示	1	記録
10	武蔵野市	第五中学校	並木 聡	1	
11	町田市	小山田中学校	渡邊 和彦	1	世話人
12	小金井市	南中学校	大島 みのり	2	
13	西東京市	田無第一中学校	吉永 美穂	1	
14	利島村	利島中学校	田中 智靖	2	記録

担当 東京都立教育研究所統括指導主事 本庄 文男

目 次

I	研究主題設定の理由と研究のねらい	2
II	研究の構想	2
III	第1分科会「インターネットを活用した実践的なコミュニケーション能力の育成」	3
1	主題設定の理由と研究のねらい	3
(1)	主題設定の理由	3
(2)	研究のねらい	3
2	研究の方法	4
(1)	文献研究	4
(2)	授業研究	4
3	研究の内容	5
(1)	教室内LANを利用した授業の実践事例〈第1学年〉	5
(2)	Eメールを使った授業の実践例〈第2学年〉	7
4	インターネットを活用する際の環境条件や課題	11
IV	第2分科会「実践的なコミュニケーション能力を育成する音読指導」	14
1	主題設定の理由と研究のねらい	14
(1)	主題設定の理由	14
(2)	研究のねらい	14
2	研究の方法	14
3	研究の内容	14
(1)	英語指導における音読指導の意義	14
(2)	効果的な音読指導の工夫	15
(3)	音読からコミュニケーション活動への発展の在り方	17
(4)	実践事例	18
V	研究成果と今後の課題	24

I 主題設定の理由と研究のねらい

1 主題設定の理由

21世紀の地球社会はこれまで以上に国際化、情報化が進行するボーダレスの社会になるものと考えられる。そのような社会では、自分とは異なる考えや価値観をもつ人達とお互いに理解し合うことが必要になり、相手の文化や個性を尊重しつつ、自らの考えや意見を明確に相手に伝えるコミュニケーション能力が不可欠である。

新しい学習指導要領で英語が選択教科から必修教科になり、英語での実践的コミュニケーション能力育成に重点が置かれたことは、まさに時代の要請を受けてのことである。その要請に応えるべく、本研究では実際に生徒に英語を使用させながら実践的コミュニケーション能力を育成することを研究の柱とした。

2 研究のねらい

実際に生徒に英語を使用させるには使用場面の設定と、使用する必然性が求められる。そこで本研究では、使用場面の設定と必然性を保障するものとしてインターネットという教具に着目し、インターネットを活用したコミュニケーション能力の育成について研究した。

またもう一つの側面として、英語の基礎学力を十分身に付けさせた上で、英語を段階的に使用させる試みを行い、この側面では音読指導に注目した。この2つのアプローチを通して、実践的コミュニケーション能力育成のための指導の工夫を行った。

II 研究の構想

つぎのように2つの分科会を設けて研究を行った。

研究主題	実際に英語を使用してコミュニケーション能力を育成する指導の工夫	
	第1分科会	第2分科会
分科会 研究主題	インターネットを活用した実践的コミュニケーション能力の育成	実践的なコミュニケーション能力を育成する音読指導
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> * 教室内のEメールの活用 * 国内や海外の学校とのEメールによるコミュニケーション活動 * チャットの活用 * テレビ会議 	<ul style="list-style-type: none"> * 音読の指導法 * 音読から speaking への活動 * 教科書を最大限に活用したコミュニケーション活動 * 3年間を見通した指導計画
授業研究	<ul style="list-style-type: none"> * 擬似体験Eメール * リアルなコミュニケーションとしてのEメール * チャット 	<ul style="list-style-type: none"> * さまざまな音読指導の工夫 * 音読指導からコミュニケーション活動への発展

Ⅲ 第1分科会

研究主題

インターネットを活用した実践的なコミュニケーション能力の育成

1 主題設定の理由と研究のねらい

(1) 主題設定の理由

今日、教育の場ではIT革命の影響を受け教育機器が日々著しく進歩しており、中学校にも情報通信ネットワークが急速に導入されつつある。しかし、ネットワーク機器が導入され始めてからまだ日が浅いこともあって、その活用についての研究はいまだ十分とはいえない状況である。

インターネットをはじめとする情報通信ネットワークでは、リアルタイムで外国人と実際にコミュニケーションを行うことができる。生徒は実際に生きた言語を使用するリアルな体験を通して「聞くこと」「話すこと」だけでなく「読むこと」「書くこと」を含めた実践的コミュニケーション能力を伸ばしていくものと期待されている。

新学習指導要領の中学校外国語科改訂の基本方針には、「実践的コミュニケーション能力の育成をはかるため、言語の実際の使用場面に配慮した指導の充実を図る」と述べてある。さらに外国語科の目標の一つに、「外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成をはかる」という記述がある。即ち、外国語をコミュニケーションのための生きた言葉として使えるような授業実践が教室内で行われれば、上記の目標達成に寄与することが大きいと考える。

そこで、英語の授業におけるインターネットの活用について、実践上の課題を明らかにするとともに、指導内容、指導方法、指導計画の在り方等を探ることが大切であると考え、この主題を設定した。

(2) 研究のねらい

インターネットの魅力には、大きく分けて4つある。検索、Eメール（ボイス・メール、ビデオ・メールを含む）、チャット、そしてホームページによる情報発信である。

検索の魅力は、自分の興味関心ある情報を、世界中から一瞬にして手に入れることができることである。それぞれの分野におけるスペシャリストが、その得意とする分野の情報を、ホームページという形で提供しているおかげである。このホームページを読むだけでも、「英語を読んで理解する」という能力をつけることができると思うが、きわめて受動的な形にとどまってしまう。そこで、これを実践的コミュニケーションに発展させていくために、読解した内容に対するメッセージメールを作成する指導をする。そしてそれを送る。返信メールが来れば、それがリアルなコミュニケーションの第一歩となるであろう。

こうした活動を発展させると、最終的には海外の学校との交流も可能となる。適切な相手を見つけ、Eメールを活用していけば、実践的コミュニケーションの場として、非常に

魅力的なものとなる。さらに1歩進んでチャットを授業で扱うことができれば、コミュニケーションの実践が教室内で可能となる。それはまさに、Classroom Englishから English Communicationへの脱皮となるはずである。

こうした魅力あるネットワークを活用し、実践的コミュニケーション活動をまず学級内の生徒同士で行う。次に国内の他の学校の生徒と交流し、やがてそれを海外にまで展開することをねらいとし研究を進めた。

なお、本研究では「生徒が英語を使ってホームページを作成する」という内容は、生徒の個人情報を慎重に取り扱いたいことや、研究期間が限られているために十分に深められないこともあり、研究対象とはしなかった。

2 研究の方法

研究方法としては、文献研究、授業研究を行った。

(1) 文献研究

インターネットを英語の授業に活用した事例の先行研究は文字ベースではあまり多くはなかった。むしろ、インターネットのホームページでよい先行研究に出会うことができた。

(2) 授業研究

インターネットの持つ機能的な魅力（検索・Eメール・チャット）を活用して次のような授業の研究を行った。

①パソコンの基本操作、及び英字入力の方法を身に付けさせる授業

（パソコンの起動方法、マウスの使い方、ウィンドウズの操作、アルファベットのキー配列を覚えると同時に、英字入力の方法など。）

②教室内LANを使い、学級内でEメールによるコミュニケーションを行う授業

③検索を活用して海外とのコミュニケーションに発展させていく授業

④Eメール（ボイス・メール、ビデオ・メール）を活用したコミュニケーション活動の授業（国内、海外）

⑤チャットを活用したコミュニケーション活動の授業

3 研究の内容

(1) 教室内LANを利用した授業の実践例<第1学年>

コンピュータ教室の40台のパソコンが接続されている（Local Area Networkが構築されている）環境で、1年生の生徒を対象に行う。

① 単元の指導計画

	指 導 内 容	学 習 内 容
第1時	パソコンの基本操作、及び英字入力の方法 <使用ソフト：Petit Chat（プチチャット） [Free Software]>	学級内のネットワークを使って簡単な単語や文章を入力し、お互いの文を読み合う。
第2時	教室内LANを使ったコミュニケーション活動 <使用ソフト：どきどきアタック[S社]>	絵と、Whatを使った疑問文を相手側に発信する。相手側はその質問に答える。 A：What is this? B：It's a hat.
第3時 (本時)	教室内LANを使ったコミュニケーション活動 <使用ソフト：Petit Chat（プチチャット） [Free Software]>	Who am I? 2人1組になって、Ping-Pong Communicationを行い最終的に相手が誰なのかを当てる。

② 本時の展開

	学 習 活 動	生徒のパソコン操作	指導上の配慮事項
導入 10分	1 英字入力の復習 聞こえてくる単語、もしくは文をできるだけ速く正確に入力する。パートナーと交代しながら行う。	① Petit Chatを立ち上げる。 ② 自分の名前を入力してチャットルームにはいる。（全員同じ部屋に入る。）	最近習った単語、文を取り上げて発音する。（2、3回）。

<p>展開 35分</p>	<p>2 ときどきアタックの復習 ①質問の文と絵を作成して、それを相手側に発信する。 ②受信した質問文に対して、パートナーとともにその質問文に答える。そしてそれを相手側に発信する。 ③送られてきた解答については、正解かどうかを相手に伝える。</p>	<p>①ときどきアタックを立ち上げる。 ②早くできあがったところは、パートナーを交代し、質問の文を2つ作る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 絵は、あらかじめ考えさせておく。 • 発信する相手が偏らないように配慮する。(発信の相手を自動設定とする。)
	<p>3 教室内チャット ① Do you like~? What () do you like? という形を使って、チャットの相手とコミュニケーションさせる。 ② 時間を区切って、その時点で、Who am I ? という質問文を発するようになる。(できるだけ多くの会話をさせる) ③ 会話を発表する。</p>	<p>①Petit Chat を立ち上げる。 ②自分の名前が相手にわからないようにペンネーム(動物や植物など)を使う。 ③あらかじめ指定されたチャットルームに入る。(ここでは1対1のチャットを行う。)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 自分の相手が誰なのかわからないので、最終的にその相手を推理できるように質問を多くするように指示する。 • ペアを組んでいる生徒には、一緒に考えさせる。 • ペアワークの延長と考え、できるだけ多くQ&Aができるように指示する。 • Originality のある文を中心に発表させる。
<p>まとめ 5分</p>	<p>① Who, What の用法についての確認を行う。 ② 次時の予告</p>	<p>①ソフトをオフにする。 ②ウィンドウズを消す。 ③パソコンをオフにする。</p>	

学級内のチャットの例 (BがAをあてる。)

A : Hello. I like sports.<送る>	
B : Hello. What sport do you like? <送る> (以下同様)	
A : I like soccer.	B : Do you like music?
A : Yes, I do.	B : What music do you like?
A : I like <i>Hikaru Utada</i> .	B : Do you go to Juku ?
A : No, I don't.	B : What food do you like?
A : I like <i>ramen</i> . Who am I?	B : Are you Kenji?
A : Yes, I am.	

(2) Eメールを使った授業の実践例<第2学年>

① バーチャルEメールを使った授業の実践例

ア 授業の目標

「こねっとワールド」というソフトウェアを使って、擬似的にEメールで教室の外の世界と交流する練習を行う。生徒は英語を使用して行うコミュニケーションが、世界に広がっていくことを実感でき、関心・意欲が高まる。

イ 実践事例

(ア) 指導計画

第1時 アルファベット入力練習

第2時 Eメールの送受信の練習①

第3時 Eメールの送受信の練習②(本時)

(イ) 本時の目標

- ・バーチャル(仮想現実体験)ではあるが、コンピュータを使ってメールのやりとりをすることによって、Eメールの使い方を学ぶ。
- ・Eメールのやりとりを通して、英語の4技能の力をつける。

(ウ) 本時の指導過程

	学 習 活 動	留 意 点
導 入	①コンピュータを起動させ、「こねっとワールド」を立ち上げ、「バーチャルEメール」が行える環境を設定する。 ②前時の復習する。	パソコンがうまく起動しない生徒への補助をする。
展 開	①「バーチャルEメール」に用意されているトピックの中から、自分で気に入った話題を選び“Let's Try!”をクリックする。 ②自分の名前を半角英字で入力する。 ③画面上のガイダンスに沿って進め、送信用メールを完成させていく。 ④送信用のメールが完成したところで、配布したプリントにメール全文を写す。 ⑤メール内容を写し終わったら、「送信」をクリックし返信が来るのを待つ。 ⑥返信のメールが画面に表示されたらその文をまたプリントに写す。 ⑦送信、返信のメールを書き終わったら、プリントの裏にその英文を日本語に訳す。 ⑧1つのトピックでメールの送受信が終わったら、同じ要領で別のトピックを選び、同じ要領で進めていく。	・LANシステムを使い、うまく先へ進めない生徒の補助をする。 ・パソコンを先に進めるだけでなく、画面に表示された文をしっかりと書き写させる。
整 理	生徒を指名し、自分が送信したメールと返信されてきたメールを読んで発表する。	

(四) 評 価

- ・コンピュータをある程度使いこなすことができたか。
- ・メールを書くための英作文を正しく完成することができたか。
- ・自分の作成したメールを正しく読むことができるか。
- ・発表生徒の英文を正しく理解できたか。

参考：HP(ホームページ) <http://www.wnn.or.jp/wnn-s/e-mail/index.html>

② 海外生徒とのEメール交換の実践例

ア 目 標

メール交換を通して、英語を「読む」、「書く」力を付ける。

イ 指導の手順

(ア) バーチャルEメールを通して、メールの書き方等を学んだ後、実際に海外の生徒とのメール交換を行う。

(イ) 生徒を2人1組にして、以下の3つの中から、自分たちが交流をしたいところを選ばせた。

グループA：当区と姉妹都市関係にある、オーストラリア、ベルモント市に住む生徒とのメール交換を行う。

グループB：“epal classroom exchange”(ホームページ)を使い、リストにある学校の中から、自分たちが交流をしたい所を選び、メール交換を行う。

グループC：“epal classroom exchange”を使い、当校にアクセスのあったクラス、生徒とのメール交換を行う。

ウ メールの実例

(送信1)

Hello.
We are students of K junior high school in A ward.
We have studied English for two years. It is difficult for us, but we study it hard.
My name is K.Y. I'm a boy. My hobby is listening to music and cooking. I want to be a veterinarian.
My name is N.K. I'm a girl. My hobby is playing the Electronic organ. I practice it every day. My hobby is knitting, too.
We want to find what you want. Please send e-mail to us soon.
Your friends,
K.Y. N.K.

ウ NASA（アメリカ航空宇宙局）のカードを送る（NASA Kids）

アメリカの航空宇宙局について子供向けに紹介されているホームページがある。これを利用すると、宇宙飛行士やスペースシャトルの内部など、美しい写真がついたカードをEメールで送ることができる。このホームページでは、対話形式のゲームやクイズなどもあり、インターネットを利用して楽しく学習を進められる。

(ア) 目 標

英語で近況報告など短いメッセージを書き、NASAの写真付カードとして送信する。身近な人とのコミュニケーション活動を意欲的に実践できるようにする。

(イ) 指導過程

カードの英文を書くスペースはあまり広くないので、英文をその場で考えることも可能である。送信先は友人や家族、あるいはALTや教師などから選択する。

(ウ) 評 価

作成したカードを印刷し、それを教師が評価する。完成した生徒のカードを画面に表示させ、他の生徒に転送して生徒同士で評価しあうこともできる。また、印刷した物を教室などに掲示するのもよい。

カードを作成する活動は、他にも応用することができる。いくつかのホームページでは写真やイラストのついた様々なグリーティングカードの中から気に入ったものを選び、自分でメッセージを書き入れてEメールで送ることができる。ALTや友人と誕生日カードやクリスマスカードを交換しあうことによって、生徒の学習意欲を喚起しながら、場面に応じたコミュニケーション能力を育てたい。

参考HP <http://www.north-pole.net/index.htm>
<http://www.whitehouse.gov/WH/kids/html/home.html>
<http://www.nasa.gov/kids.html>

4 インターネットを活用する際の環境条件や課題

(1) 必要な環境・設備・条件

- ① コンピュータが設置されていることは言うまでもないが、その他にインターネットが接続可能なハードウェア・ソフトウェアの設置、整備が必要である。また、同時性を重視して相互にEメールを送受信する授業を展開するのであれば、動画、音声をアレンジするソフトウェアも必要となる。
- ② インターネットが接続されていない学校で上記のような活動例を実践する場合には、コンピュータ教室内LANシステムを利用し擬似体験をすることも可能である。また、擬似体験の可能なソフトウェアもあるので、メーカー等に問い合わせてもよい。

(2) 実践上の課題

- ① 実際に授業を行うと、事前には想定できなかった問題、トラブルが発生することがあ

る。スムーズに授業を展開させるには、教員が、コンピュータについての技術、知識を高めておく必要がある。また、可能であれば、複数の教員で指導にあたる方がより良く展開できる。

- ② 一番大切な点は、「英語の授業」であるということ、教員そして生徒が、十分に認識することである。例えばEメールを利用した授業では、メールの内容を英文で送るにしても、説明など他の部分では日本語が多くなるのは止むを得ない。

その場合、ともすると技術科をはじめとした他の教科との差異が感じられない授業が展開される可能性もある。従って、事前事後の学習を工夫し、こういう形態の授業も英語学習の一環であるということ意識させねばならない。送信、受信したメールを音読させる、日本語に翻訳するなどの活動が必要となる。

- ③ コンピュータを利用した授業では、進度が個々に異なることが多い。また、授業に直接関係のないソフトウェアを稼動したり、思わぬトラブルで動きがとれなくなるなど、様々な問題の発生も考えられる。それ故、通常の授業以上に個々の状況を見ることが重要となる。

- ④ 年間計画にどのように位置付けるかも、大いに悩む点である。コミュニケーションの実践の一つとして位置付け紹介する程度であるのか、表現能力の育成として継続した指導を行うのか、事前に十分検討しなければならないだろう。補足ではあるが、今後は選択教科としての展開も可能であろう。

- ⑤ この分科会の研究では、コミュニケーション能力の育成に焦点をあて、それに関わるコンピュータの利用に的を絞ったが、授業でコンピュータを使用できる場面は他にもある。それは、情報検索を中心とした授業である。教科書会社が開設しているホームページには、教科書の内容の補助資料となるようなホームページがいくつか紹介されている。それを利用することで、やや扱いにくい内容や、指導する教員が多くの研究を必要とする内容でも、瞬時に調べ理解を深めることが出来る。

- ⑥ Eメール、インターネットを利用した授業を展開する際には、次の点に留意したい。
- ・送信先、英文の内容を十分に点検する。(生徒指導上の問題を考慮する)
 - ・英文作成にあたり、辞書を使用する、翻訳ソフトを利用する、パターンを作成しておき部分的に入れ替えさせるなど、その方法を考えておく。
 - ・電子メール、インターネットを利用する上でのルール、マナー(一般に『ネチケット』と言われる)を十分に指導しておく。(『ネチケット』については、以下に記述の項を参照されたい。)

(3) インターネットを使用する上での留意点

インターネットを使用する上で、以下のルールおよびマナー(『ネチケット』)を確認し事前に十分指導しておく必要がある。なお、ここに挙げたものは、生徒に指導する上で必要最低限の部分のみを抜粋、列挙したものである。

インターネットでは文字によるコミュニケーションが大きな役割を担っている。ちょっとした表現が誤解を招いたり争いのもとになるので、言葉を選んで相手を傷つけることが

ないように心がける。

また、人を不愉快にするような話や言葉遣い、感情的な表現は避ける。

個人情報を発信するときには、それによって発生する可能性のある不利益にも配慮する。また、他人の情報を本人の了解なく公開し、プライバシーを侵害しない。社会的評価を低下させるような内容も掲載しない。

- ① 本人の許可なく、その顔や容姿などを掲載すると、肖像権侵害となる。画像を添付し送信するときには、くれぐれも注意する。
- ② 文章や写真、音楽、ソフトウェアなどの著作物に関する権利は、著作権者だけが持っている。これを複製、転載したり、改変したりする場合は、著作権者の許諾を得なければならない。

参考HP 電子ネットワーク協議会

「インターネットを利用する方のためのルール&マナー集」より部分的に抜粋

(4) コンピュータを利用した授業の推進

1-(1)主題設定の背景」に触れていたように、新学習指導要領の目的、目標を達成するために、コンピュータの利用は非常に有益である。というのは、直接面と向かって対話することが苦手な生徒にとって、「話すこと」、「聞くこと」を違う形で実現できるからである。また、「読むこと」、「書くこと」の指導も同時に行える利点も見逃せない。

上記(2)でいくつかの問題点、今後の課題を挙げたが、それらを解決することにより、良い効果を期待できるであろう。積極的に自己を表現し、実践的コミュニケーション能力の育成を図るために、コンピュータを利用することは新しい試みではあると思うが、今後多くの学校で推進していくべきであると考えている。

IV 第2分科会

研究主題

実践的なコミュニケーション能力を育成する音読指導

1 主題設定の理由と研究のねらい

(1) 主題設定の理由

「実践的なコミュニケーション能力の育成をめざす」英語の授業を展開していく過程で、ほとんどすべての英語科教員が教科書の音読を実施しており、音読が効果的な指導法の一つであることは広く認められている。各学校ごとに地域や生徒の実態が異なっていたとしても、多くの教員が「生徒全員が教科書をすらすらと音読できるようになること」を指導目標に掲げている。

しかし、音読は簡単に実践できる指導法であるにもかかわらず、その基礎的・理論的な意義が意外に深められていない実情がある。特に、実践的なコミュニケーション能力の育成に音読がどのように結びついていくのかについての説明は十分とは言えない。また、音読を効果的に実施するためにはどのような工夫をすべきかについても、十分に検討されているとは言い難い状況がある。

そこで、本研究では基礎的な音読練習を、より応用的・発展的なコミュニケーション活動へと高めていくプロセスに注目し、実践的なコミュニケーション能力の育成につながる音読練習の在り方を探ることにした。

(2) 研究のねらい

- ① 英語の授業における音読指導の意義を探る
- ② 様々な音読指導の工夫をする
- ③ 音読からコミュニケーション活動への発展の在り方を探る

2 研究の方法

(1) 文献研究

東京都立研究所のデータベース、及びインターネットに公開されている文献等から、音読に関する資料を調べ、効果的な指導方法を学んだ。様々な「音読の仕方」があることを確認した。

(2) 質問紙調査

生徒の実態を把握するために音読についての意識調査を実施した。

(3) 授業研究

授業研究を行い、効果的な音読指導の在り方やコミュニケーション活動への発展のさせ方を探った。

3 研究の内容

(1) 英語の授業における音読指導の意義

- ① 音読とは何か

「音読」とは教科書の文章を声を出して読むことを意味する。「音読が上手である」という場合、次のような下位の構成要素をもっている。

- | | |
|---|--------------------------|
| ア | 単語が読める。正しく発音できる。 |
| イ | 音を流れとしてとらえ、リンキングできる。 |
| ウ | 間の取り方が分かる。 |
| エ | 目が文の先へ先へと追いかかけられ、つまずかない。 |
| オ | 息が十分に吸えて発声にボリュームがある。 |
| カ | 内容を理解し、感情を込めて読むことができる。 |

② 音読のメリットとデメリット

音読には全体音読、グループ音読、ペア音読、個人音読などがあり、教師にとっては授業準備の手間がかからず、生徒にとっては簡単に組み入れる学習活動である。

声を出して読むことで「読める」「読めない」の判断がしやすく学習活動の途中経過がよく分かる。

一方、音読は機械的な活動に陥りやすく、ただの「棒読み」になってしまう危険性がある。全体読みでは、個別生徒の声が聞き取りにくく、生徒の学習状況が把握しにくい場合がある。

③ 音読についての生徒の意識

都内公立中学校の2年生と3年生400人を対象に質問紙調査を実施したところ、次のような結果が得られた。

- | | |
|------------------------------------|---------------------------------|
| ◆ 「英語を声に出して読むことのよさは何だと思いますか」(複数回答) | |
| …………… 「英単語や英文が暗記しやすくなる」 | 66% |
| …………… 「英語らしい発音を身に付けられる」 | 54% |
| …………… 「英語を話せるようになるために必要」 | 37% |
| ◆ 「あなたは教科書を声に出して読んでいますか」 | …………… 「はい」 62% |
| ◆ 「あなたのクラスメートは教科書を声に出して読んでいますか」 | …………… 「はい」 81% |
| ◆ 「声を出して教科書を読むことは楽しいですか」 | …………… 「とても楽しい」「楽しい」 40% |
| | …………… 「あまり楽しくない」「楽しくない」 48% |
| 「楽しくない理由は何ですか」 | …………… 「単語が読めない」「自信がない」「恥ずかしい」など |

この調査から、生徒は音読の意義をある定程度認識していることや、自分以上に他のクラスメートが声を出していることを意識していることが分かる。

さらに、ふだんの授業における観察法によって把握したところによれば、音読が上手にできるようになりたいと思っている生徒は多い。また、音読には自分で英語の音声をつくる楽しみがあると感じている生徒も少なくない。全体読みでは個人が埋没するので、そのことに気安さを感じる生徒と、そこで気を抜いてしまう生徒がいる。

学年進行で言えば、学年が上がるにつれて声を出す生徒が少なくなる傾向があり、効果的な音読を実施するうえでの課題となっている。

(2) 効果的な音読指導の工夫

① 楽しく音読できるような授業の雰囲気作りをする

声を出すことが楽しいと感じられ、失敗しても許されるという安心感のある授業の雰囲気を作る。そのためには、全体音読→グループ音読→ペア音読→個人音読、の順序で活動を行い、ある程度練習をした後、個人の発表に移るように工夫する。

② 「どのように音読すればよいのか」という観点を生徒に示す

音読は実践的なコミュニケーション能力を育成するための基礎作りの活動である。生徒に「コミュニケーションを意識した音読ができるようになることが大切だ」という観点を音読練習の前にオリエンテーションとして示す必要がある。

生徒に示すべき音読指導のポイントとしては次のことがある。

- | |
|------------------------------|
| ○ Speed・・・(読みの速度) |
| ○ Pronunciation・・・(発音) |
| ○ Clearness・・・(声の明瞭さ) |
| ○ Loudness・・・(声の大きさ) |
| ○ Rhythm (イントネーション、ストレスなど) |
| ○ Content (話の内容、感情移入も含む) |
| ○ Attitude (姿勢のよさ、アイコンタクトなど) |

これらのポイントを段階的に身に付けさせる指導により、機械的な繰り返しの音読に止まらず、実践的なコミュニケーション能力を育成するための応用的・発展的な活動に結びつけていくことができる。

応用的・発展的な活動、例えば、Explanation (生徒が外国人指導員に日本の文化や生活習慣等を英語で説明する)、Show & Tell、Speech、Dramaなどの活動では音読練習との関連を図りつつ、生徒の個別指導に当たることができる。例えば、生徒Aには「SpeedとLoudnessに注意して音読練習をしよう。そうすれば、もっと効果的なSpeechができる」生徒Bには「Attitudeに注意しよう。そうすればもっと楽しいShow & Tellの発表ができる」というように指導できる。

③ 様々な音読の方法を使い分ける

様々な音読の方法を、実践的なコミュニケーション活動との関係を考慮して整理した。

区分	名称	活動内容	コミュニケーション活動との関連
全体音読指導	1語読み	・単語を1語ずつリピートする。 ・1語読みで席順に読む。	・単語の発音ができる。 ・語のストレスになれる。
	句読み	・文を意味のまとまりに区切って読む。 ・初期段階では、実際にまとまりごとに、スラッシュを入れて読む。	・意味のまとまりをつかむ。 ・音を流れとしてとらえ、リンキングができる。
	Buzz Reading	一定の時間内に文章を何回読めるかに挑戦させる。	・音を流れとしてとらえ、リンキングができる。 ・自然なスピードで発音できる。
	同時読み	・モデルと同じ速さで読む。 ・シャドーイングの前段階の練習	・リズムをつかむ。 ・自然なスピードで発音できる。
	shadowing	・モデルの後を「0.1秒遅れて読む感じで」同時通訳をしているように読む。	・スピードになれる。 ・間の取り方がわかる。 ・感情を込めて発音する。

ペア音読指導	制限時間読み	<ul style="list-style-type: none"> 「このページを30秒以内で読みましょう」という指示で、説明文などを交互に一文ずつ読む。 	<ul style="list-style-type: none"> 音を流れとしてとらえ、リンキングができる。 自然なスピードで発音できる。
	役割読み	<ul style="list-style-type: none"> 役割を決めて対話文を読む。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手の目を見て読む。内容を理解して読む。
	状況設定読み	<ul style="list-style-type: none"> 役割を決め、状況を自由に設定して、対話文を読む。 	<ul style="list-style-type: none"> 風邪をひいている二人の会話、老人2人の会話など、状況を自由に設定。 使用場面を意識して読む。
個人音読指導	Read & Look up	<ul style="list-style-type: none"> 教科書を黙読させたあと、教師の合図によって、教科書を見ないで音読させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 無理なく暗唱する。 Speakingの基礎作り。
	制限時間読み	<ul style="list-style-type: none"> 「このページを30秒以内で読みましょう」という指示で、説明文などを読む。 	<ul style="list-style-type: none"> 音を流れとしてとらえ、リンキングができる。 自然なスピードで発音する。
	Last Sentence Dictation	<ul style="list-style-type: none"> LSDと呼ばれることもある。 教科書を閉じてCDを聞き、教師がPauseで止めた後の英文を生徒が言う。 	<ul style="list-style-type: none"> Listeningの能力の伸張。 内容を理解して読む。 自然なスピードで発音できる。

(3) 音読からコミュニケーション活動への発展の在り方

① ペア音読指導から「プラスワン」活動への発展

ペア音読指導の「役割読み」（役割を決めて対話文を読む）や「状況設定読み」（役割を決め、状況を自由に設定して対話文を読む）の活動を実践的コミュニケーション活動へと発展させていくために、「プラスワン」活動を取り入れることができる。

「プラスワン」活動とは、教科書の文章そのままではなく、どこかで生徒が独自の表現を入れて音読を進める方法である。対話文の答えの箇所や、説明文の「意見」を述べる箇所で、自分の気持ちや考えを表現できる。

② 個人音読指導から、「聞くこと」「話すこと」への発展

個人音読指導の「Last Sentence Dictation」は、CDの発音をよく聞いていなければ、どこでPause（停止）が入ったかが分からないこともあって、生徒の聞く力を伸ばすのに効果がある。また、全体音読やペア音読、個人音読をある程度行った後、本文の英語がある程度すらすらと言えるようになった段階でこの活動を行えば、「話す力」を伸ばすのに効果がある。

③ 音読練習に使用する教材の工夫

教科書の本文をもとに、実際のコミュニケーション場面に近い形に書き直した対話文を作成し、音読練習に用いると効果的である。この対話文はペアでの音読練習がしやすく、簡単な英語で自己表現がしやすいように主語「I」で始められることを配慮して作成した。日常的なコミュニケーションの場面を意識し作成したものであり、周期的に用いることにより確実に暗唱できるように指導する。

(4) 実践事例

以上のような基本的な考え方に基づき、「実践的なコミュニケーション能力を育成する音読指導」についての授業研究を行ったので、実践事例として報告する。

【実践事例 1】 変化に富んだ音読練習から実践的コミュニケーション活動への展開

① 本事例における音読指導の工夫

- ア 1 回ごとの練習時間を短く設定して生徒の集中力を持続させる。
- イ 変化に富んだ練習し、同じ英文をくり返し読んでも飽きさせないよう工夫する。
- ウ 「どのように音読してほしいのか」という観点を生徒に伝える。
- エ 全体練習からペア同士での練習へスムーズに移れるように配慮する。
- オ 個人音読の場面では相手の目を見て話せるように「Read & Look up」を心がけるように指示する。

② 単元の指導計画

使用教科書：New Horizon Book 1

第 1 時	Unit 7 Starting out	導入と全体音読練習 「1 語読み」「句読み」「Buzz Reading」など。
第 2 時	由美たちの冒険 謎のマシン (1)(2)	内容理解と全体音読練習、グループ音読練習、ペア音読練習
第 3 時 (本時)	由美たちの冒険 謎のマシン (1)(2)	全体音読練習と場面や登場人物の気持ちを考えたグループ音読練習。「役割読み」など。
第 4 時	由美たちの冒険 謎のマシン (1)(2)	ペア音読練習で感情を込めて読む。相手を意識し eye contact を取るために、Read & Look up を心がけさせる。
第 5 時	由美たちの冒険 謎のマシン (1)(2)	個人音読 Last Sentence Dictation プラスワン活動
第 6 時	Let's try and write	オリジナル脚本を音読練習 オリジナル脚本の暗唱

③ 本時の展開

過程	指導内容	学習内容	評価の観点
導 入	1 Greeting	あいさつ	楽しい授業の雰囲気ができているか。
	2 全体音読	前時の内容を思い出しながら音読 (Buzz Reading)	自由にウォームアップしようとしているか。

展 開	3 全体音読	テレビ画面に表示された教科書本文を、教師の指示で、 ① 1語ずつ ② 区切れごとに ③ 1文全体を通して、読む。	・大きな声で発音しているか。 ・英語らしい発音をしているか。
	4 全体音読 (リズム読み)	ギターのリズムに合わせて読む。	読みの速度に慣れようとしているか。
	5 全体音読 (消しゴム読み)	教師はテレビ画面の本文を少しずつ消していく。生徒は消された部分をすぐに読む。	間違いを気にせず、声を出して読んでいるか。
	6 グループ音読	グループごとに登場人物の気持ちを考えながら読む。	感情表現ができているか。
	7 ペア音読 (役割読み)	役割を決めてペアで音読	読みの速さ、間の取り方ができているか。
	8 ペア音読 (状況設定読み)	本文の内容を状況設定を自由に変えて読む。	状況設定の創意工夫ができたか。
	9 ペア音読 (Read & Look up)	登場人物の気持ちを理解しながらグループで音読する。感情を表情に出してみる。Read & Look upを心がける。	相手の目を見て、感情を込めて音読ができているか。
10 ペア音読 (プラスワン活動)	オリジナルな文(セリフ)を最低一つは考え、教科書本文を一部変えて読む。知っている言葉を上手に使えるように努力する。後のオリジナル脚本に発展させていく。	オリジナルな文を作ることができたか。	
整 理	11 まとめ 12 次時の予告	・オリジナル文をノートに書く。 ・次時はオリジナル脚本へと進むことを予告する。 ・本時の自己評価をカードに記入	・本時の学習の到達点を把握できたか。 ・次時の内容を確認できたか。

④ 本時で展開した「変化に富んだ音読」の工夫

ア Buzz Reading の工夫

生徒に集中して音読をさせるために、1分間で本文を何回読めるかというようにチャレンジさせる。それと同時にBGMにテンポの速い曲を、やや大きめの音でかけ、生徒が大きな声で読んでも気にならないようにする。曲の終了と同時に Buzz Reading は終わる。

イ 1語読みから1文読みへ

パソコン画面に教科書の本文を取り込んで、テレビモニターに映して生徒に見せるか、または黒板に本文の拡大コピーを張り、生徒の顔を上げさせる。単語を1語ずつ、教師がポインターで指しながら後について発音させる。1文読み終わるごとに一気に1文全体を読む。1語ずつから1文へ「ゆっくり」「ふつうに」「やや速く」と変化をつけて練習する。Slow learnerにも配慮しながら練習する。

ウ リズム読みの工夫

ギターやリズムマシンを使ってリズムを刻み、リズムに載せて音読する。ゆっくり、ふつうに、やや速くと変化をつけて練習する。目標となる速さが具体的に示されるので、生徒はチャレンジするつもりで学習に取り組む。つまづきが見られる英文や、リンキングを意識させることが必要な場面ではくり返し練習する。

エ 消しゴム読み

パソコン画面に教科書の本文を取り込んでおき、テレビモニターに表示する。一度通して読んだ後、教師が少しずつ消していきながら読ませる。2, 3年生では、教科書から選んだ重要文について音読するとよい。パソコンを使わない場合は、黒板に板書しておいて少しずつ消しながら読ませることができる。

オ 役割読みの工夫

教科書本文の登場人物のセリフがどのような気持ちで話されているかを考えさせるために、登場人物を描いたプリントに気持ちをト書き形式で記入させる。

⑤ 音読の評価の観点

音読指導の観点を右の表のように作成し、生徒に目標を持たせるとともに、個別指導の資料とした。

この評価の観点はスピーチや Show & Tell の際にも使用でき、音読からコミュニケーション活動への発展の過程を見通すことができる。

Speed	A	B	C	D
Pronunciation	A	B	C	D
Clearness	A	B	C	D
Loudness	A	B	C	D
Rhythm	A	B	C	D
Content	A	B	C	D
Attitude	A	B	C	D

⑥ 本時の考察

ア 飽きさせない工夫をしながら音読練習を繰り返した結果、生徒は暗記しようと思わなくても自然に英文が暗唱できる状態になった。

イ ペア音読指導から「プラスワン」活動へ発展させていく過程では、スムーズに音読できることが支えとなり、いろいろな台詞を付け足すなどできる限り自分の言葉として英語を使おうとする態度が見られた。

【実践事例 2】 教材を工夫した音読練習から実践的コミュニケーション活動への展開

① 本事例における音読指導の工夫

ア 教科書の本文をもとに、実際のコミュニケーション場面に近い形に書き直した対話文を作成し、音読練習に用いる。この対話文はペアでの音読練習がしやすい形式で書かれている。また自己表現に応用しやすいように、主語「I」で言えるように配慮して作成されている。また、日時を隔てて周期的に用いることにより、確実な定着を図る。

イ 教師作成の対話文を導入段階で利用することにより、教科書の内容理解をスムーズにすすめる。

ウ 音読マラソンを実施している。これは家庭学習や休み時間などに、保護者や友人、担任の教師などを相手に生徒が自主的に本文の音読をして、音読の回数を記録し、プ

リントのマラソンの距離を進めていく方式の練習である。音読の対象は教科書本文か、または教師作成のやさしい対話文かのどちらかであり、生徒が選択できる。

② 単元の指導計画

使用教科書：New Crown Book 1

第1時	Lesson 7 (1)(2)新出文法事項
第2時	前時の復習と Lesson 7 (1)の内容理解、教科書音読練習
第3時	Lesson 7 (2)対話文練習、内容理解、教科書音読練習
第4時	Lesson 7 (1)(2)の復習、対話文練習、教科書音読練習
第5時	ALTとの Team Teaching * 本時
第6時	Lesson 7 (3) の内容理解、教科書音読練習
第7時	全体の復習

③ 本時の展開

過程	指導内容	学習内容	評価の観点
導 入	1 Greeting	あいさつ	楽しい授業の雰囲気ができるか。
	2 Bingo game	家庭学習で準備したページで単語のビンゴをする。	単語を聞き取れたか。
展 開	3 Warm up	既習の対話文を使って口慣らしをする。	既習の対話文を言えたか。
	4 Reading practice (Chorus)	教科書49ページをALTのあとについて全体で音読する。	読む速さやイントネーション、リズムに気を付けて読めたか。
	5 Reading practice (Pair)	ペアで音読練習をする。	感情を込めて読むことができたか。
	6 Explain Kanji letters used in the student's name or make Kanji riddles like an example showed in the text-book.	<ul style="list-style-type: none"> ・グループになって漢和辞典を使い、生徒名の漢字の意味を調べる。または漢字のなぞなぞを考える。 ・調べたこと、考えたことをまとめて発表するために英文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・既習の表現をうまく使えるかどうか。 ・まとめる途中でALTや指導者に英語で質問できたか。
	7 Practice before the presentation	グループで作成した英文内容をALTに発表できるようにグループで音読練習をする。	練習ができたところは、指導者の前で練習する。1人1回以上発言できるようセリフを考える。

	8 Presentation	生徒は自分の名前に使われている漢字の由来や漢字のなぞなぞを ALT に話す。	・声の大きさ、速度、話の内容、発音などをみる。 ・メモを見ないで説明できたか。
整理	9 Consolidation	発表についての ALT と指導者の感想を聞く。	カードを使って、自分の発表を自己評価する。

④ 本時で展開した音読練習の工夫

ア 実際のコミュニケーション場面に近い形に書き直した対話文を用いた音読練習

次ページに掲載したような対話文を使って、音読練習をした。掲載したものは、() が多い形のものだが、もとは空所のないプリントを使用した。徐々に空所を増やしていくことで、生徒が自然に表現を身に付けられるように工夫した。

イ 音読練習の成果を実際のコミュニケーションに生かす場を設定する

本時ではグループで作成した英文内容を ALT に発表できるようにグループで音読練習をした。このことにより生徒は音読練習の成果を試すことができ、以後の音読練習への動機付けができた。

⑤ 本時の考察

ア 教師自作の対話文を用いることによって、教科書の内容についての理解がスムーズに進んだ。そのため教科書の音読にも意欲的に取り組む様子が見られた。

イ 様々な音読の方法で練習することにより、生徒の声は次第に大きくなっていった。そして練習の過程で無理なく英文を覚えてしまう生徒が増えた。

ウ 教科書の内容を応用して、生徒の名前に使われている漢字の意味や、自分たちで考えた漢字のなぞなぞを ALT に英語で説明する場面では、生徒たちは既習のフレーズを上手に用いて積極的に発表することができた。これは「発表したい」という意欲があったために、既習の知識を総動員して英文を作った結果であると考えられる。

【生徒が作成した漢字のなぞなぞ】

S : We teach Japanese to you. Are you ready?

ALT : Sure!

S : Do you speak Japanese?

ALT : No, I don't.

S : Can you write any Kanji?

ALT : No, not at all.

S : Can you read this kanji? (Writing kanji. 青青青)

ALT : No, I can't. What does it mean?

S : This means "Blue" and three blue.

ALT : So three blues?

S : No. But your guess is right.

The answer is "Blue three", a Hong Kong TV star.

Do you know him?

ALT : (Big laugh) I know. He is famous.

S : Yes. But please remember this is not really a kanji. It's a joke.

ALT : OK. Thank you very much.

【実際のコミュニケーション場面に近い形に書き直した対話文の例】

Let's インタビュー

A : May () ask you a question?	ちょっと聞いていい？
B : ().	もちろん。
A : () () do you like and what food () you like?	どんな食べ物が好きで、どんな 食べ物がきらい？
B : I like () and I () like ().	() が好きで () が嫌い。
A : I (). And () () do you () get up?	へ～。それといつも何時に起き るの？
B : I usually () () at (). () () you?	たいてい () に起きるよ。 君は？
A : I usually () () about ().	だいたい () かな。
B : () () do you () home?	何時に家を出るの？
A : I () at ().	() かな。

【実践事例3】 3年間を見通した指導計画

— 音読練習から実践的コミュニケーション活動への展開例 —

基礎的な活動である音読練習は、応用的・発展的な活動、例えば、Explanation（生徒が外国人指導員に日本の文化や生活習慣等を英語で説明する）、Show & Tell、Speech、Dramaなどの活動との関連を図りつつ指導できる。次の表は3年間を見通した指導計画の例である。1年時から生徒にこの指導計画を示し「こんなことができるようになる」という目標を示すのも一つの方法である。

	Show & Tell	Explanation	Speech、Drama
1 年	○身近な物で自己紹介 【教科書の読みで基本文を定着させ、自分の言葉を付け加えられる】	○自分の名前、簡単な漢字をALTに説明する。 【教科書の読みを深めることで相手とのやりとりを理解する】 ⇒実践事例2	○対話形式の読み物をペアで感情を入れて読む。 【ドラマの下地作り⇒ペアーディングの重要性を理解する】 ⇒実践事例1

2 年	○自分の得意なこと、内面を表現できるような自己紹介。 【1年生の活動を発展させる。自分の考えや意見を述べられる】	○日本で話題になっている身近なことや現状をALTに伝える。 【教科書の読みを深めることで、相手にわかりやすく伝える方法を理解する】	○スピーチ 将来の夢や自分のなりたい職業 【教科書の読みを通してスピーチの仕方を理解し、実際に行う】
3 年	○日本の文化の紹介 Show & Tell 形式で ALT に説明する 【1・2年の両活動をリンクさせ、自分のことや自国のことをいかに相手にわかりやすく伝え、理解してもらうか創意工夫させる。】(教科書によっては Show & Tell 形式の内容を扱っているものもあるので読みから導入できる。)		学習の集大成となるようなドラマをつくる。 【音読・表現活動の総仕上げとして最後に設定する】

V 研究の成果と今後の課題

現代社会においては、国際化、情報化の波が押し寄せ、以前にも増して「国境を越えた」コミュニケーション能力を要求される時代になっている。

新学習指導要領に明確に打ち出された「実践的」という言葉には、「実際に英語を使う能力」を習得する必要性がより強調されている。本研究部会では2つの分科会に分かれ、実践的なコミュニケーション能力の育成についての研究を進めた。

第1分科会は、インターネットを活用した英語の授業の工夫について研究した。インターネットの活用の最終目標として、相手のことを意識しながらリアルなコミュニケーション活動ができること＝[外国にいる生徒とのチャット] に置き、擬似Eメール体験をはじめとして、学級内、国内他校とのネットワーク活動等の研究授業を実践した。

その結果、インターネットを活用しての授業は実践的なコミュニケーション能力の育成に効果があった。しかし、いくつかの課題も明らかになった。例えば、海外の人と実際にコミュニケーション活動をしようとする場合の相手を探す方法と、その内容(トピック)が課題である。この課題についての取り組みの実践事例を示した。

第2分科会は、個々の生徒の到達レベルに配慮しつつ、まず「教科書を音読できること」を実践的コミュニケーションの育成の出発点ととらえ、音読のできる能力を土台にして、コミュニケーション能力を育成するための道筋を明らかにしようとした。

研究の結果として、様々な音読方法が工夫できること、教科書の本文を書き直したプリントの活用、場面設定等を工夫すること、3年間を見通した指導計画により音読指導をスピーチやドラマなどの応用的な活動に発展させていくことが有効であることが、授業研究を通して明らかになった。

今後の課題としては、インターネットの活用では年間指導計画への位置付けの在り方を工夫すること、音読指導ではコミュニケーション活動へと発展させるための授業での場面設定の在り方を考える必要があること、があげられる。